

【原著】

# 保育巡回相談におけるコンサルテーションの機能の質的分析 —KJ 法を用いたモデル化とテキストマイニングによる属性分析—

大 橋 智

〈要旨〉本研究では、保育園を対象とした巡回相談における機能について、質問紙調査での自由記述をもとに、KJ 法によるモデル化とテキストマイニングを用いた属性分析を行った。その結果、KJ 法によるモデル化においては4つの段階が示され、第一段階「獲得」として「専門的な知識や方法」と「新しい子どもへの視点」からの理解の獲得が、また第二段階として「安心」の獲得が記述されていた。第三段階として「対応」としても「専門的知識に基づいた対応」と「新たな視点に基づいた対応」が記述されていた。第四段階「変化」については、「保育者自身」「子どもの成長」「クラス運営」「保護者への対応」「園内連携」「園外連携」の領域が記述されていた。テキストマイニングを用いた対応分析では、経験年数・役職・園の規模において検討した。その結果、役職においては園長と主任・担任の間、経験年数において1年～・20年～と3年～・6年～・11年～の間において質的な違いが見られた。

キーワード：保育巡回相談、コンサルテーション、質的分析、テキストマイニング

## 問題

### 保育現場における巡回相談の意義

わが国において個別の配慮を必要とする障害を抱えた幼児への保育園・保育所での取り組みは、1970年代半ばに障害児の統合保育として始まっている。保育現場では、障害を抱えた幼児のほか、虐待などの個別的な配慮を必要とする幼児は増加傾向を示している（全国保育協議会、2008）。

配慮を必要とする幼児への保育者が行う支援では、保護者への相談や専門機関への紹介とともに、心理学や医療、福祉などの専門家の巡回支援が大きな比率を占めており（全国保育協議会、2008）、保育者のニーズも高い（高橋、2006）。すなわち、専門家の巡回支援としての「保育巡回相談」、「コンサルテーション」の役割は、インクルーシブな保育環境を成立させるためには、重要な役割を

持っていると言えるだろう。

### コンサルテーションの機能

保育巡回相談やコンサルテーションの効果や機能について、質問紙調査や事例検討、面接調査などを用いてそれを明らかにする研究が行われている（Table.1）。

たとえば、浜谷（2005）は保育所を対象とした質問紙を用いた研究において、発達臨床コンサルテーションのモデルに基づく巡回相談の効果として6つの機能（保育方針の作成、障害などの理解、保育意欲、保育成果の評価、協力連携、クラスその他児への保育）を因子分析によって抽出している。また、担任と園長・主任などの管理職、他のクラスの保育者と項目ごとの評価を比較しているものの、機能ごとの評価は行われていない。

また、森（2007）は自らが巡回相談の中で担当した相談事例の主訴について事後分類を行い、保

育所や幼稚園におけるコンサルテーションの機能として、5つの概念（不安や焦燥感・閉塞感の表明、ストラテジー等を模索する質問、ストラテジーの発見・開発の報告、対象児の成長および実践の確認・検証、システムとネットワークに関する提起）を提起している。しかし、これらの概念の分類は、筆者自身が行っており、客観的な評定や分類の一貫性について妥当性の検証が困難であった。

これらの先行研究によっては共通する項目も多い。鶴（2012）は2011年までの保育巡回相談の先行研究を展望するなかで、巡回相談の機能を列举し、子ども理解、対応方法、保育の進め方、保護者との協力、他機関との連携、同僚との連携に関する支援、保育者の情緒的支援であるとし、その中核は、子ども理解、対応方法、保育の進め方の支援であると指摘している。

先行研究の検討では、対象となった保育者の主観的な効果認知について、全体的な枠組みを捉えることを目的としているが、保育者の属性や保育所の規模などコンサルテーションの効果に影響を及ぼす要因について、十分に検討がなされていない。また鶴（2012）が指摘するように、巡回相談および保育に関わるコンサルテーションの効果を検証するにあたり、巡回相談の機能の記述や実態に基づく効果測定を行っていく必要がある。

そこで本研究では、保育巡回相談の機能・効果を記述し、効果検証を行うための視座を得るため、質的分析としてKJ法（川喜田, 1967; 川喜田, 1970）を用いた保育者の自由記述に基づく主観的な効果認知を描出し、加えて同じデータを用いて、数量的分析としてテキストマイニング（樋口, 2004）を行い、重層的な分析によって保育巡回相

Table.1 先行研究における保育巡回相談の機能の例

著者	浜谷直人	森正樹	芦澤清音 浜谷直人 田中浩司	真鍋健	阿部美穂子
出版年	2005	2007	2008	2011	2013
目的	支援機能と構造のモデル化	ニーズ調査	支援機能と構造のモデル化	運営の課題の明確化	効果的な巡回相談の考察
収集方法	質問紙	相談主訴の分類	質問紙	質問紙	質問紙
分析方法	因子分析	事例検討	因子分析	KJ法	記述統計
デザイン	事後評価	事後評価	事後評価	事後評価	事後評価
対象園	保育所（2自治体）	保育所・幼稚園（9自治体）	私立幼稚園（1自治体）	保育所（1自治体）	保育所（園）（1自治体）
対象	園長・主任 障害児担当 担任・看護師 その他	保育者	園長・副園長 主任 障害児担当 担任・フリー	保育者 コーディネーター	保育所園長 園長と同様の責任のある立場で保育の運営管理を行っている者
対象園数	38	40	14	43	24
人数	241	189事例	110	23	24
機能1	保育方針の作成	不安や焦燥感・閉塞感の表明	保育方針	捉え方／関わり方に関する助言の提供	支援方法の理解と実践
機能2	障害などの理解	ストラテジー等を模索する質問	関心意欲	保育者の不安・疑問の軽減と見通しの獲得	子ども理解
機能3	保育意欲	ストラテジーの発見・開発の報告	対象児理解	保健師等からの情報提供	支援シート

機能4	保育成果の 評価	対象児の成長 および実践の 確認・検証	保護者理解	否定的評価の 理由	保育士間連携
機能5	協力連携	システムと ネットワークに 関する提起	協力	要望	保育士ケア
機能6	クラス他児への保 育	—	—	—	家族支援

談の効果に影響する要因について検討を行う。

## 目的

本研究では、保育巡回相談というコンサルテーションにおける保育者の主観的效果の認知を評定するにあたり、そのモデルを作成することを目的として、質問紙における自由記述をもとに質的分析を行う。

また同じデータを用いてテキストマイニングを行い、対応分析による数量的分析を行い、コンサルテーションの効果に影響する要因について検討を行う。

## 研究1 KJ法を用いた質的分析

### 方法

#### 研究参加者

A市保育課を通して市内35園を対象に調査票を配布し、各園で巡回相談を利用したものを中心に10名の保育者の回答を求めた。調査票は、フェイスシートと(a)巡回相談の効果評価、(b)巡回相談に関するニーズ、(c)就学前支援に関するニーズから構成され、「巡回相談を通して感じた変化について」の自由記述をもとめた。その結果、31園より228名の回答を得た。本研究においてはそのうち巡回相談を利用した21園97名の自由記述を分析の対象とした。

#### 分析対象

調査によって得られた97名の自由記述をもとに意味のまとまりのある文章182記事を分析の対

象とした。

### 分析方法

保育コンサルテーションに関わっている研究者3名とコミュニティ心理学を専門とする研究者1名の4名によって、KJ法(川喜田, 1967; 川喜田, 1970)を用いて分析を行った。

質問紙調査によって得られた自由記述について、意味のある文章毎に切り分け、各々の文章を分類に用いる記事とした。各記事の分類においては、4名の研究者が共同で分類を行い、分類について見解が分かれたものについては、各々合議を行い解決した。

### 倫理的配慮

本研究では、質問紙の調査項目の内容について、事前に保育所における巡回相談に関わる心理士や保育関係者と訳語の整理などを行った。また、収集された自由記述の内容について、個人の同定される情報を符号化し、処理を行った。個人情報保護の観点から、調査票のフェイスシートには個人情報保護の遵守とデータ解析の匿名化する旨を伝え同意を得た。

### 結果

KJ法を用いた質的分析によって、大きく2つの領域と4つの段階を持つカテゴリーが得られた。

得られたカテゴリーと概念について、Figure.1とTable.2で示した。

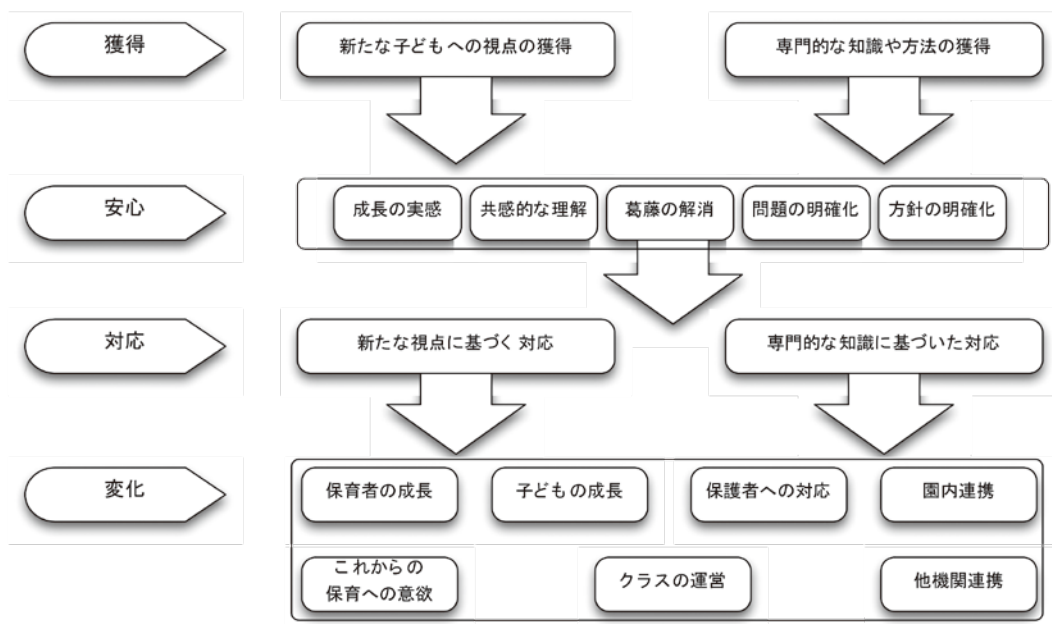


Figure.1 KJ法による保育巡回相談のコンサルテーション機能のモデル図

Table.2 保育巡回相談コンサルテーションにおける機能

機能名	定義	具体的な記述例
<b>獲得</b>		
新たな子どもへの視点の獲得	子どもの理解について、自らの実践と巡回相談員の視点を対象化し、その利点を述べる	自分がやっていることがいいのか、ちがうのかと困っている時、自分とはちがう視点から見ての言葉がもらえて役に立った。
専門的な知識や方法の獲得	子どもの理解について、専門的な知識や情報からその利点を述べる	気になる子の問題行動など、専門的な分野から原因、要因を説明してもらえたので、子どもの気持ちや考えている事など理解することができた。
<b>安心</b>		
成長の実感	巡回相談による保育者自身の成長を肯定的に受け留めている	巡回相談を受け、対応の仕方など日々の保育に取り入れることで、目に見えて変化していく子どもを見て、少しは自分が役に立てたのかなあと感じる事ができとても嬉しく思っています。
共感的な理解	巡回相談による保育者への気持ちの受け留めを述べている	保育士は、ほめられることはあまりない中、ほめてくださり、導いてくださり、話をよく聞いてくださり、勇気をいただけます。
葛藤の解消	保育者の抱えている葛藤との関わりを述べている	日常生活の中で感じていたモヤモヤとしていたことも言葉にしてくださったので、より納得できたところがあり、今後に活かすことができたのではないかと思います。
問題の明確化	抱えている問題が明らかになり対応への繋がりを述べている	問題をかかえている子どものことを、いつもどうしたらいいか考え日々生活しているが、巡回相談を受けることで、また新たな気持ちでその子どもへの対応策を見つけることができる。
方針の明確化	抱えている問題への方針が明らかになったことを述べている	専門的立場からアドバイスいただくことにより、現場としては、今やっていることに自信を持ったり、方向性を見出したり等、大変ありがたいです。

対応		
新たな視点に基づく対応	子どもの新たな視点からの理解に基づいての対応を述べている	子ども達の問題行動ばかりが気になり悩んでいたが、別の視点で捉える事で、子どもの心に少し近づけたように思う。
専門的な知識に基づいた対応	子どもへの専門的な知識や情報に基づいての対応を述べている	問題のある子に対しての具体的な対応策や保育するうえでのポイントを教えていただき、自分もよりいっそう、その子に対して意識を持ててかかわるようになりました。ありがとうございました。
変化		
保育者の成長	保育者自身の成長について述べている	クラスをどうしたらいいか本気で悩んだ私にとっては、私自身も救っていただけたと感謝しています。
これからの保育への意欲	巡回相談後の保育への意欲について述べている	先生から助言して頂いた事をもとに今後の保育にあたっていきたいと思えます。ありがとうございました
子どもの成長	子ども自身の変容や成長について述べている	巡回相談を通じて、子ども1人1人に適した対応の方法も教えていただき、それに基づいて子どもとかかわりをもっていくと、少しずつ子どもの行動に変化がでてきました。
クラスの運営	クラスの変容について述べている	子どもへの対応の仕方（注意の仕方等）を教えていただき、クラスの中で共通理解することができました。
保護者への対応	保護者への対応方法や保護者自身の変容について述べている	心理士の先生から子どもの行動について、また、親の気持ちや状態について説明してもらい、また、親への言葉かけの方法などをアドバイスしてもらい、私自身が親に接するのに気持ちが楽になった。
園内連携	職員間の連携について述べている	子どもへの対応についての迷いが少なくなったこと、職員間の中で共通意識が持てたことはよかった。
他機関連携	他機関との連携について述べている	特に様々な面で困難を抱えている子どもの対応は、それぞれの専門機関とのつながりなくしてはできないことと実感しています。

保育巡回相談のコンサルテーションの効果認知モデルとして記述された機能を、カテゴリーごとに概観する。

まず保育巡回相談の機能によって「獲得」されるものとして、「専門的な知識や方法」と「新しい視点」の2つの機能を命名した。

「専門的な知識や方法」は、問題行動の「原因や要因」の分析、「具体的な関わり方の方法」、心理士という専門家から見た「専門的な観点」を提供する点が挙げられていた。

「新しい視点」は、「別の視点で捉える事」や「子どもの立場に立った視点」や、「整理され、問題点が明確になり」、「自分自身の考えをすっきりまとめる」といった問題に対する「視点」を提供する点が挙げられていた。

その次に「安心」の段階が見出された。「安心」

の機能は、成長の実感や心理士からの共感的な理解、保育者の抱える葛藤の解消、問題や支援方針の明確化とあわせて記述されていた。

また「対応」の段階の機能として「専門的な知識」に基づく対応や「新たな視点」に基づく対応を、対象となる子どもや保護者など「日々の保育」に適用されていた。これらを通して、子どもの成長や保護者の変容、保育者自身の成長やこれからの保育への意欲といった変化や園内・園外での連携についてつながりを明確化する機能が見出された。

「変化」の段階の機能として、7つの領域（保育者の成長、これからの保育への意欲、子どもの成長、クラスの運営、保護者への対応、園内連携、他機関連携）が見出された。「保育者の成長」では、保育にあたっの悩みを、巡回相談を通して



解決したことが叙述されていた。「これからの保育への意欲」では、巡回相談をもとに今後の保育へ意欲を高めたことが叙述されていた。「子どもの成長」では、子ども自身の変容や成長について変化として言及されていた。「クラスの運営」では、子どもへの対応を通したクラス全体の変容が言及されていた。「保護者への対応」では、巡回相談時に協議した保護者への対応についての変化が言及されていた。「園内連携」では、子どもへの対応を巡回相談という機会に協議することで、職員間の連携に変化があったことが言及されていた。「他機関連携」では、他の専門機関との連携について変化があったことが言及されていた。

これらの叙述から、保育者は巡回相談において、自らの持つ視点とは異なる専門的、もしくは新たな視点を、共感的な理解や問題の明確化を通した

安心できる環境で相談員から提示され、日々の保育の中で実際に対応を試み、いくつかの領域において変化を実感するような機能モデルを描出することができた。

## 研究2 対応分析を用いた分析

### 方法

#### 研究参加者

研究1と同じく、21園95名の保育者を対象とした。

#### 分析対象

調査によって得られた95名の自由記述をもとに意味のまとまりのある174文章を分析の対象とした。その内容をTable.3にまとめた。

Table.3 分析対象となった文章の記述統計（文章数）

		経験年数					
		1年～	3年～	6年～	11年～	20年～	計
役 職	園長	0	0	2	1	12	15
	主任	0	1	2	4	22	29
	担任	13	48	24	33	12	130
規 模	規模小 60人以下	3	22	12	1	21	59
	規模中 61～90人	2	17	7	13	11	50
	規模大 91人以上	8	10	9	24	14	65
計		13	49	28	38	46	174

※ 対象保育所数： 21園 保育者数： 95名

### 分析方法

テキストマイニングのソフトウェアであるKHcoder（Version 2.beta.32e）（樋口, 2004）を用いて、対応分析と特徴語の抽出を行った。語の抽出については、MeCab（Version 0.996）（工藤・山本・坪井・松本, 2002）を用いた。

分析の手続きにおいては、質問紙調査によって収集された自由記述について、意味のある文章毎に切り分け、各々の文章をテキストファイルに整形した。整形されたファイルを、MeCabを用いて形態素解析し、IPA コーパスを用いた辞書に基づく抽出された語の類似度を評価して、

KHCoder による対応分析を行った。

KHCoder による対応分析においては、最低頻出数5回、対象品詞を16品詞（名詞・サ変名詞・形容動詞・ナイ形容詞・副詞可能・タグ・感動詞・動詞・形容詞・副詞・名詞B・動詞B・形容詞B・副詞B・名詞C・否定助動詞・形容詞（非自立））に設定した。その結果、対象語数は108語となった。またグラフ化するにあたり、上位60語をプロットした。

対応分析においては、自由記述の内容について、役職（園長・主任・担任）、経験年数（1~2年、3~5年、6~10年、11~20年、20年~）、園の規模（規模小:60名未満・規模中:60~90名・規模大:90名~）による差異を確認することを目的とした。

## 倫理的配慮

本研究では、収集された自由記述の内容について、個人の同定される情報を符号化し、処理を行った。また、個人情報保護の観点から、調査票のフェイスシートには個人情報保護の遵守とデータ解析の匿名化する旨を伝え同意を得た。

## 結果

### 分析文章の記述統計

対応分析において、分析を行った記事数は174記事で、そのうち文章数は210文章であった。総抽出語数は5780語で、そのうち分析に使用したものは2253語であった。抽出後の異なり語数は、821語であり、分析に使用したものはそのうち

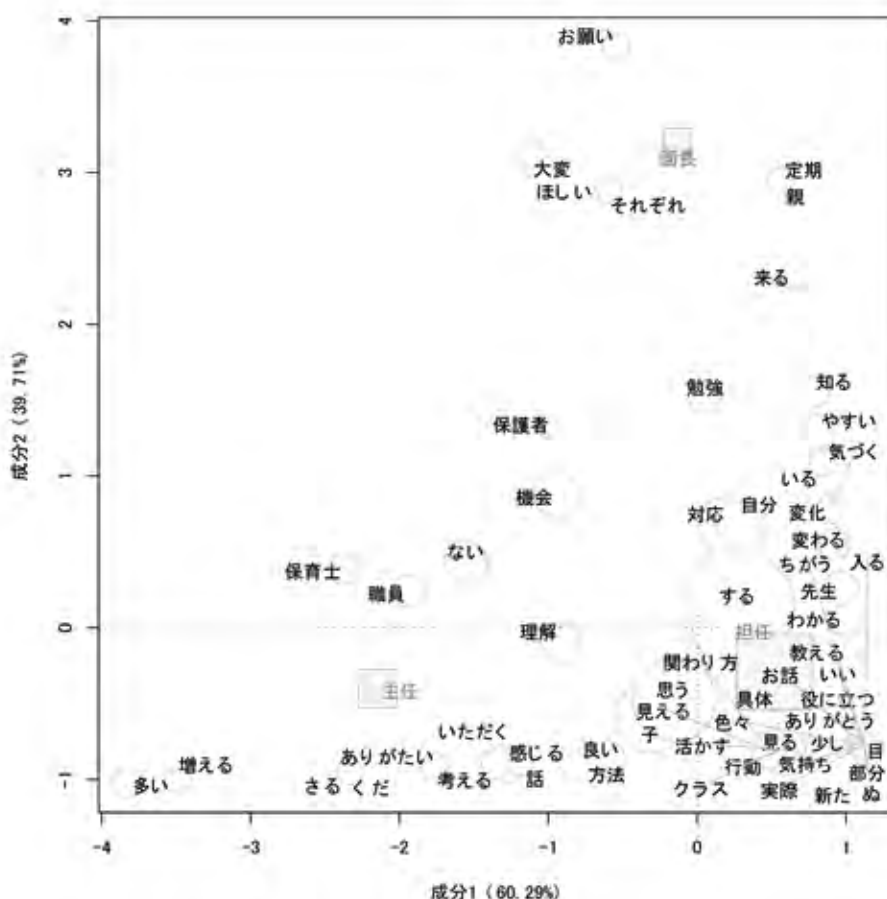


Figure.2 保育者の役職による対応分析

X 軸：第1成分「子どもの支援と保育士の支援」（寄与率60.29%）  
Y 軸：第2成分「保育内での支援と保育外の支援」（寄与率39.71%）





あった。第1成分については、「子どもと取り巻く環境」と命名した。布置されている単語からは、経験年数1~2年と20年以上の2つの群は、その他の群に比べ「子ども」に関連する単語から遠く、「保育者」や「保護者」などの子どもを取り巻く環境への言及が多い傾向がみられた。(Figure.3、Figure.4)

第2成分(28.26%)においては、経験年数3~5年、6~10年、11~20年の3群が並び、経験年数の経過による差異がみられた。第2成分については、「問題の受け止めと具体的解決」と命名した。布置されている単語からは、経験年数3~5年は、「わかる」「実際」など現状の問題理解について、6~10年では「新た」「気持ち」「関わり方」「方法」

など新しい視点や具体的な解決行動、11~20年では「役に立つ」「変化」「クラス」など問題の変化を言及する傾向が見られた。(Figure.3)

第3成分(19.31%)においては、経験年数1~2年がその他の群との間に距離が見られた。第3成分については、「個別的な問題と全体的な問題」と命名した。布置されている単語からは、経験年数1~2年では、「部分」「もっと」「聞く」「専門」といった巡回相談の部分的・個別的特徴への言及がみられ、経験年数20年以上では「保育士」「職員」「時間」といった全体的な構造に関する言及がより含まれていた。(Figure.4)

### 保育所の規模によるカテゴリ

対応分析の結果、2つの成分が抽出され(第

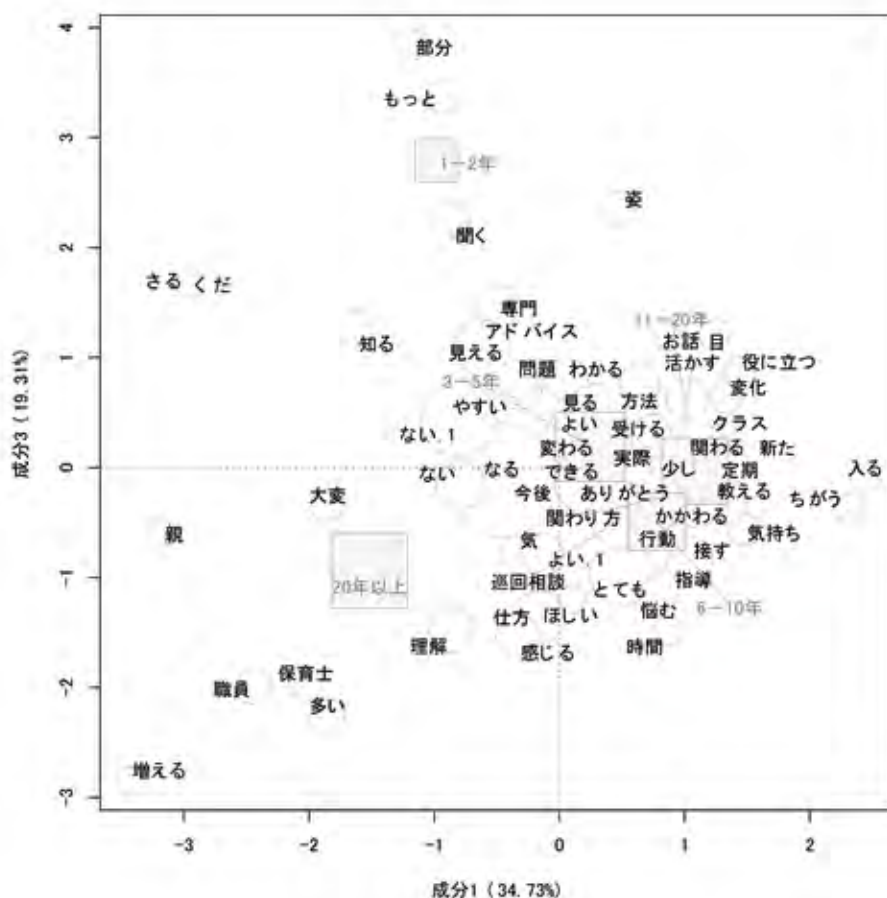


Figure.4 保育者の経験年数による対応分析 (2)

X 軸: 第1成分「子どもと取り巻く環境」(寄与率34.73%)

Y 軸: 第3成分「個別的な問題と全体的な問題」(寄与率19.31%)

1成分55.5%、第2成分44.5%)、累積寄与率は100%であった。

第1成分(55.5%)においては、規模大と規模小・規模中の間に距離が見られ、規模小と規模中は近い距離に位置していた。第1成分については、「具体的な問題解決と新しい視点の獲得」と命名した。(Figure.5)

第2成分(44.5%)においては、規模小・規模大・規模中の3つのカテゴリーがほぼ等距離でならんでいた。第2成分については、「これまでの実践と新たな実践」と命名した。(Figure.5)

布置されている単語からは、規模小園は、自分たちの実践がどうあったかを確認することをニーズとしているのに対し、規模中園ではこれから新

たに取り組むべき実践をニーズとしていた。規模大園では、具体的な問題解決がニーズとして優先される傾向が示されていた。

## 考察

### 質的分析に基づくコンサルテーションの機能

本研究における保育巡回相談のコンサルテーションの機能について、KJ法を用いて、「専門的な知識や方法」と「新しい視点」の2つの領域から、「獲得」「安心」「対応」「変化」の4つの段階を経て変容するモデルが記述された。

本研究のコンサルテーション効果認知の機能モデルを、先行研究の機能と比較すると、多くの内容

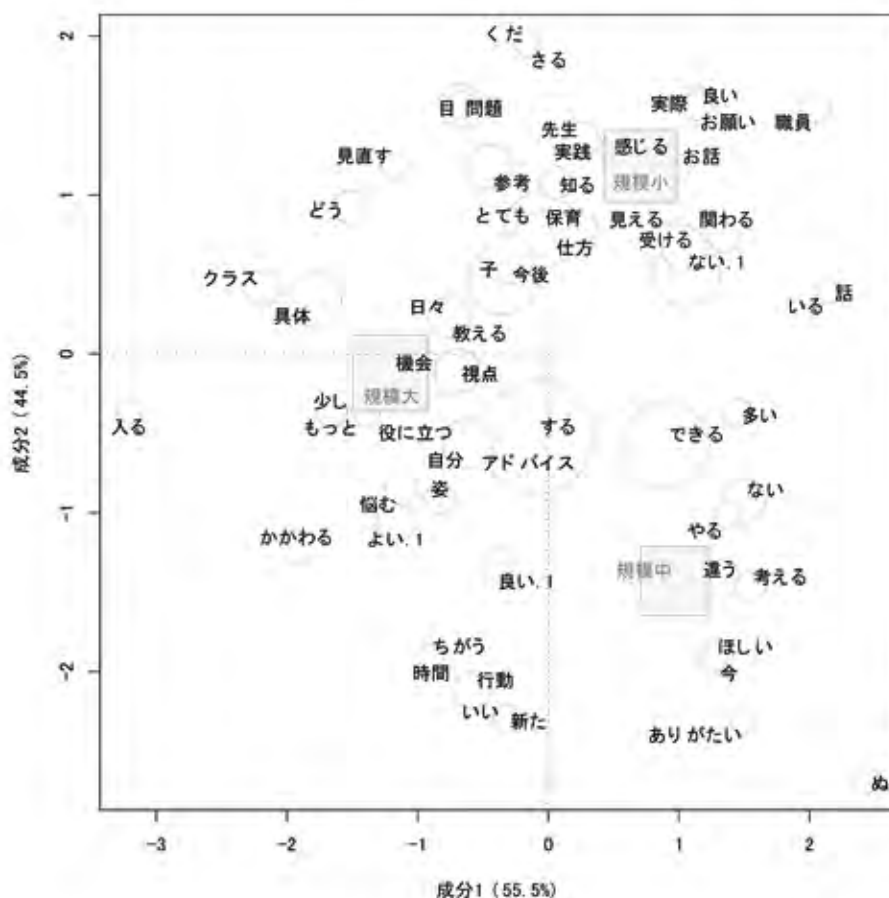


Figure.5 保育所の規模による対応分析

X軸：第1成分「具体的な問題解決と新しい視点の獲得」（寄与率55.5%）

Y軸：第2成分「これまでの実践と新たな実践」（寄与率44.5%）

が重複していることがわかる。たとえば、浜谷(2005)の発達臨床コンサルテーションモデルにおける「保育方針の作成」や「障害などの理解」は、本モデルにおける「獲得」としての「専門的な知識や方法の獲得」に対応しており、「保育意欲」は「変化」における「これからの保育への意欲」として位置づけられるだろう。

また森(2007)のモデルにおいても、「ストラテジー等を模索する質問」や「ストラテジーの発見・開発の報告」は、「専門的な知識や方法」の獲得、「不安や焦燥感・閉塞感の表明」は「安心」の段階に位置づけられる。他にも真鍋(2011)のモデルにおいても、「捉え方／関わり方に関する助言の提供」は「獲得」としての「専門的な視点」に、「保育者の不安・疑問の低減と見通しの獲得」は「安心」の段階全般に位置づけられる。

これらの機能は、コンサルテーションにおける3つの機能に整理しなおすことができるだろう。第一にコンサルテーションの「相談内容」がもたらす機能である。本モデルにおける「専門的な知識や方法」の獲得や「専門的な知識や方法」に基づく対応は、子どもの行動変容や保護者への対応など、問題解決的な機能としてコンサルテーションの相談内容がもたらす機能である。

第二にコンサルテーションの「相談過程」がもたらす機能である。本モデルにおける「新しい視点」の獲得や「安心」は、心理的安定の獲得や不合理な信念の解消といった保育者の成長やこれからの保育への意欲につながり、コンサルテーションのもつカウンセリング的な相談過程がもたらす機能である。

第三にコンサルテーションの「相談構造」がもたらす機能である。本モデルにおける「安心」や「園内連携」、「他機関連携」などは、巡回相談という場が生じることによって生み出される園内での保育者間の連携やクラス報の運営、すなわち保育者間の関係性の変容や情報交換といった、コンサルテーションの場のもつ相談構造がもたらす機能である。

これらのコンサルテーション機能は、保育巡回

相談という場において、コンサルタント自身の語りや相談の枠組みの操作によって、より効果的な実践を生み出すことが可能になる視座を提供している。

## テキストマイニングを用いたコンサルテーション機能の検討

本研究では、質的分析に用いた自由記述のデータについて、テキストマイニングを用いてその属性ごとのコンサルテーションの機能の差異を検討することにした。その結果、役職、経験年数、園の規模において、その機能に差異があることが見出された。

「役職」では、管理職(園長・主任)と子どもと直接関わる担任保育者の間には、コンサルテーション機能の差異が見られた。先にまとめたコンサルテーションの3つの機能(相談内容・相談過程・相談構造)から指摘するならば、「園長」は保護者への支援や巡回相談自体が安定した定期的な相談として行われるよう、「相談構造」や「相談内容」について重視していることが伺われた。また「主任」は、保育士や職員といった保育を担う者への支援や相談の機会が増えることなど、「相談構造」や「相談過程」について重視し、保育者の「安心」や園内の連携などに配慮していることが伺われた。「担任」については、子どもの行動変容につながるような具体的な方法や保育者自身の成長など、「相談過程」や「相談内容」を重視していることが伺われた。

「経験年数」においては、経験年数1～2年の保育経験が少ない保育者と20年以上の保育経験が非常に長い保育者、そして3年以上から20年未満の保育の中核的に担う保育者の間でコンサルテーション機能の差異が見られた。

経験年数1～2年の保育経験が少ない保育者と20年以上の保育経験が非常に長い保育者は、保育士自身に対する支援のニーズが高く、コンサルテーションにおける「相談構造」の機能を重視する傾向が見られた。

このことは経験年数の少ない保育者が、日頃の保育の活動を運営することに追われ、問題を抱え

る子どもやその背景要因を十分に見ることができていないことや、保育経験の非常に長い保育者は、保育所内で管理的な立場を担うことが多く、子どもへの支援よりも保育者への支援を重視しているのではないかと考えられる。

また経験年数3年以上の保育者においても、3～5年、6～10年、11～20年と経験年数が長くなるに従い、重視するコンサルテーション機能が「問題の理解」から「新たな視点」の獲得、「具体的な問題解決」、「変化」への実感へと移行する様子が伺われた。すなわち、保育者の経験の経過によって、子どもの抱える問題の理解が、専門的な視点の獲得から新しい視点の獲得へ、そして具体的な問題解決への対応と段階的に変容することが考えられる。

このような点から、保育に関わる中核的な保育者に対しては、時間をかけて丁寧に相談をすすめたり、相談者の発言を傾聴し共感的な理解を示すような「相談過程」を前提として、子どもの抱える問題を保育者が受け入れ、問題解決につながるような具体的な方法や、実際の保育場面に適合した方法など「相談内容」について深めていくようなコンサルテーションの展開が効果的に機能することが考えられる。

すでに様々な知識や経験を積み重ねている保育者にとって、新たな視点の獲得は、自分自身の実践をふりかえり承認してもらえる機会として、安心感につながるだろう。また、専門的な知識の獲得は、自分自身の実践を意味づける機会として、機能することも考えられる。

園の規模においては、保育する子どもの人数が多い「規模大」園では、具体的な問題解決をより望む傾向が、「規模中」園では、新しい視点をより望む傾向、「規模小」園では園内での連携をより望む傾向が確認された。これらの結果から、規模の大きな園では、コンサルテーション機能における「相談内容」が重視され、園やクラスの実態を踏まえた実際に適応可能な方法を提示することがコンサルタントに求められるだろう。また中規模の園では、保育者はコンサルテーションの「相

談過程」がより重視され、保育者自身の成長や様々な視点からの子どもの行動の機能分析が必要となるだろう。また、規模の小さな園では、コンサルテーションの「相談構造」が重視され、保育者が共に情報交換が可能なように研修やカンファレンス形式でのコンサルテーションを提案したり、園全体の保育者間の関係性がより充実するような支援が求められるだろう。

### 本研究の限界

本研究では質問紙調査によって得られた自由記述をもとに、質的分析と数量的な分析から重層的にコンサルテーションの機能を記述することを目指した。本研究において用いた自由記述は、記述の枠組み自体を比較的制限せずに設定したため、研究参加者によって記述量のばらつきが生じていることは否定できない。テキストマイニングの結果において、属性ごとの分析を試みたが経験年数によって人数の偏りが生じており、それらが影響していることも考えられるだろう。

一方で、質的分析と数量的分析によって得られた結果は、先行研究の内容から大きく逸脱するものではなく、個性記述的なアプローチの中から一定の一般性を担保する知見を得ることができたと考える。今後の研究においては、本研究によって明らかになった保育巡回相談のコンサルテーション機能について、コンサルタントの要因を操作することでより有効なコンサルテーションが実施可能になるか検証することが必要になるだろう。

### 【文献】

- 岸澤清音, 浜谷直人, 田中浩司 (2008): 幼稚園への巡回相談による支援の機能と構造: X市における発達臨床コンサルテーションの分析. 発達心理学研究, 19(3), 252-263.
- 阿部美穂子 (2013): 気になる子どもの保育における効果的な巡回相談スタイルの実践的検討: 保育所(園)長アンケートの分析. 富山大学人間発達科学部紀要, 7(2), 41-53.
- 浜谷直人 (2005): 巡回相談はどのように障害児統合保育を支援するか: 発達臨床コンサルテーションの

- 支援モデル. 発達心理学研究, 16(3), 300-310.
- 樋口耕一 (2004): 計量テキスト分析の方法と実践. 大阪大学大学院.
- 川喜田二郎 (1967): 発想法: 創造性開発のために. 中央公論社.
- 川喜田二郎 (1970): 続・発想法: KJ 法の展開と応用. 中央公論社.
- 工藤 拓, 山本 薫, 坪井祐太, 松本裕治 (2002): テキストデータベースからの構文構造のマイニング. 情報処理学会研究報告. ICS, [ 知能と複雑系], (45), 139-144.
- 真鍋 健 (2011): 障害のある幼児に関する保育所巡回相談の評価-X 市における保育者と保育コーディネーターへの質問紙調査より. 幼年教育研究年報, 32, 43-52.
- 森 正樹 (2007): 障害児保育実践へのコンサルテーションのニーズに関する研究-- 巡回相談のニーズ調査に基づく支援方法の検討. 宝仙学園短期大学紀要, (32), 53-59.
- 高橋 脩 (2006): 保育園・幼稚園における発達障害の発見と初期対応に関する研究. 市川宏伸 発達障害 (広汎性発達障害、ADHD、LD等) に係わる実態把握と効果的な発達支援手法の開発に関する研究 (pp.5-27). 厚生労働科学研究費補助金 疾病・障害対策研究分野 こころの健康科学研究.
- 鶴 宏史 (2012): 保育所・幼稚園における巡回相談に関する研究動向. 帝塚山大学現代生活学部紀要, 8, 113-126.
- 全国保育協議会 (2008): 全国の保育所実態調査. 全国保育協議会.

## 謝辞

本研究の実施においては、A 市保育巡回相談に関わってくださった相談員のみなさま、市保育課のみなさま、A 市発達支援連絡会のみなさまのご協力によってなしました。また分析において須賀田真理氏、山本耕太氏、脇貴典氏の協力をいただきました。ここに記し、謝意を表します。



# **A qualitative study of the itinerant consultation's function in nursery school. Modeling by “kj” method and text mining.**

OHASHI Tomo

## **Abstract**

In this research, in order to clarify the function of consultation for nurseries, we analyzed using qualitative research method and text mining based on descriptive data in questionnaire survey. Analysis by qualitative research method showed four stages and two perspectives. In the first stage, “professional knowledge and method” and “a new perspective to children” were described as “acquisition”. In the second stage, “feeling of growth” and “resolution of conflict” were described as “relief”. In the third stage, “expert knowledge” and “new viewpoint” were described as “correspondence”. In the fourth stage “change”, “growth of the childcare provider himself / herself” “growth of the child” “class management” “relationship to the guardian” “cooperation within the nursery school” “cooperation outside the nursery school” is described It was. Correspondence analysis was carried out with text mining. We examined the number of years of experience of teacher and position, position of nursery school. As a result, in the position, there was a difference between the headmaster and the chief / homeroom teacher. In terms of years of experience, there was a difference between over 1 year, 20 years or more, 3 years or more, 6 years or more, 11 years or more.

---

**Key words:** itinerant consultation, consultation, qualitative research, text mining

---